

一般大学生における発達障害の 傾向について

—— AQ, WURS, 学習面の困難状況指標を用いた予備的調査 ——

The Trait of Developmental Disorders in College Students

糸井千尋
花塚優貴

要 旨

本研究では、一般大学生を対象に、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder）、注意欠如・多動症（Attention-deficit/hyperactivity disorder）、限局性学習障害のそれぞれの傾向の把握を行った。更に、これまで本邦ではあまり調査されていなかった一般大学生における限局性学習障害傾向についての調査を行い、ASD・ADHD傾向との関連性について検討した。124名の一般大学生から回答を得た結果、学習に困難を抱えている大学生は16.1%であった。また、学習に困難を抱えている大学生は、学習に問題のない大学生よりも、情緒面や、コミュニケーション、対人関係の問題を抱えていることが明らかとなった。

キーワード

一般大学生、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、
限局性学習障害

はじめに

近年、高等教育段階における、軽度発達障害のある学生の支援のニーズが高まっている。発達障害の中でも、大学生で問題となるものとして、自

閉スペクトラム症、注意欠如・多動性障害、限局性学習症の3つが挙げられる。自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：ASD）は、相互的な社会的コミュニケーションや対人的相互反応の障害、および限定された反復的な行動、興味、または活動を基本的特徴とし、注意欠如・多動性障害（Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder：ADHD）は、不注意、多動性および衝動性を特徴とするものであり、限局性学習症（Specific Learning Disorder）は、学習や学業的技能の使用に困難がある障害である¹⁾。大学および高等専門学校を対象に障害を持つ学生数の調査を行った結果、発達障害の学生の割合は2.6%と報告されている²⁾。これは、大学の担当部署の担当者を対象とした調査であり、発達障害がある学生を「学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症等で、それぞれ、医師の診断書がある者」に限定していた。一方で、1797名の大学生を対象に、自閉症スペクトラムとADHDに関する自己記入式の質問紙で調査を行った場合には、ADHD傾向を示す大学生が2.9%、ASD傾向を示す大学生が4.4%であったことが報告されている³⁾。また、大学生111名を対象とした調査では、ASD傾向を示す学生が0.03%、ADHD傾向を示す大学生が32%である報告もなされている⁴⁾。これまでの研究では、調査人数や調査に用いる質問紙によっても、発達障害（および傾向）をもつ学生の割合にはばらつきがあり、診断をもたない発達障害疑いの学生が数多く存在している可能性がある。

発達障害の疑いのある学生が抱える困難さとして、対人関係の問題、個人的な行動や情緒面、学業上の問題、就労の問題が挙げられる⁵⁾。これらは、大学生活を送る上で、極めて大きな問題となりうる。これまでの研究では、一般大学生を対象に自己回答によるASD傾向とADHD傾向を調査は報告されているものの⁶⁾、本邦でLD傾向に関する一般大学生を対象とした自己回答による研究はなされていない。推薦入学制度や入試科目選択制といった、昨今の大学入試制度の多様化により、特定の科目の学習に困

難を抱えていても、大学に入学することが可能となった。よって、大学入学後、勉強についていけず悩んでしまうなど、学業上の困難を抱えている大学生が見落とされていた可能性がある。

よって、診断はついていないもののASD、ADHD、LD傾向を有している学生は、大学生活に困難を抱えやすく、休学や退学の1つの要因となりうる可能性がある。そこで、本研究では、一般大学生におけるASD、ADHD、LD傾向の把握と、それらの障害特性の関連性について検討した。

対象と方法

1. 調査対象者と手続き

4年制私立大学に通う大学生127名を対象に調査を実施した。性別、質問項目への記入不備3名を除く124名(男性39名、女性85名、平均年齢19.12歳)のデータを分析対象とした。質問内容はAutism Spectrum Quotient (AQ)、Wender Utah Rating Scale (WURS)、学習面の困難状況を質問項目としたものを、自己記入により回答させた。また、本調査は、文学部で設置されている心理学に関する講義の一環として、発達障害の特徴について紹介する際に、講義に先立って実施した。実施後に各自で採点が可能なように別紙のシートを配布し、それぞれの質問紙のカットオフ点を示した。講義中にカットオフはあくまで参考であること、算出された結果は多くの人がもつ特性や多様性として捉えられる点を強調した。また、実施した内容をより詳しく知りたい場合や、実施して気になる点がある場合には、担当教員に相談するか学生相談室の利用を勧めるというフィードバックを行った。なお、調査への参加は任意であり、参加しない場合にも成績には影響がないこと、匿名性を確保することを口頭で述べた。

2. 調査に用いた尺度

日本語版 Autism Spectrum Quotient (AQ-J)⁷⁾：一般成人，大学生を対象として自閉症傾向を測定するものとして開発され，幅広く用いられている自己回答式尺度である。AQは，自閉性障害の症状を特徴づける5つの領域，社会的スキル，注意の切り替え，細部への注意，コミュニケーション，想像力について各10問ずつ全体で50項目から構成されている。質問は「そうである：1点」，「どちらかといえばそうである：2点」，「どちらかといえばそうではない（ちがう）：3点」，「そうではない（ちがう）：4点」の4段階から選択して回答し，50点満点の合計点で示される。カットオフ点は33点であり，33点以上の場合，臨床的な障害となりうる水準の自閉症傾向を持っていることを示す。

Wender Utah Rating Scale (WURS)^{8), 9)}：後方視的に学童期の注意欠如／多動性障害にみられるような問題行動の経験を同定する自己回答式の尺度である。易怒性・易興奮性，衝動性の問題，情緒不安定性，学業不振，対人関係障害の5つの下位項目で，全部で25項目から構成される。質問は「全くない：0点」，「たまに：1点」，「ときどき：2点」，「しばしば：3点」，「しょっちゅう：4点」の5段階から選択して回答し，100点満点の合計点で示され，カットオフ点は46点である。

学習面の困難状況に関する質問紙¹⁰⁾：「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の6つの領域からなり，全部で30項目から構成される。質問は「ない：0点」，「まれにある：1点」，「ときどきある：2点」，「よくある：3点」の4段階から選択して回答し，少なくとも1つの領域で該当項目が12ポイント以上である場合に，学習に困難を抱えている者としている。先行研究においては，小中学生を対象に担当教員が記入していたものを，本研究では，後方視的に評価させ，自己回答式の尺度として用いた。

3. 分析方法

解析には、SPSS Statistics Version 23 (SPSS Inc, Chicago, Illinois) を用いた。

結 果

AQの合計の平均値は21.18 (SD = 6.26) であった。AQの下位検査の平均値は、社会的スキル4.53 (SD = 2.39), 注意の切り替え5.39 (SD = 1.83), 細部への注意4.73 (SD = 2.01), コミュニケーション3.60 (SD = 2.47), 想像力2.93 (SD = 1.59) であった。AQのカットオフ値を超えた者は4名 (3.2%) で、男性3名 (7.6%), 女性1名 (1.1%) であった。男女差の t 検定を行った結果、下位項目の「社会的スキル ($t = 1.26, p < .05$)」, 合計得点 ($t = 2.30, p < .05$)

表1 男女別の各変数の平均値, 標準偏差, t 値

		男性 (n = 39)		女性 (n = 85)		t 値
		Mean	SD	Mean	SD	
AQ	社会的スキル (0-10)	5.15	2.17	4.25	2.44	1.26*
	注意の切り替え (0-10)	5.69	1.70	5.25	1.88	<i>n.s</i>
	細部への注意 (0-10)	4.90	1.90	4.66	2.06	<i>n.s</i>
	コミュニケーション (0-10)	4.00	2.68	3.41	2.37	<i>n.s</i>
	想像力 (0-10)	3.31	1.51	2.75	1.60	1.82†
	合計 (0-50)	23.05	6.68	20.32	5.90	2.30*
WURS	易怒性・易興奮性 (0-24)	8.08	5.8	8.42	6.31	<i>n.s</i>
	衝動性 (0-32)	10.92	6.67	10.61	5.18	<i>n.s</i>
	情緒不安定性 (0-16)	10.62	4.52	10.04	5.02	<i>n.s</i>
	学業不振 (0-12)	3.21	3.31	3.01	2.47	<i>n.s</i>
	対人関係障害 (0-16)	5.85	3.72	4.87	3.34	<i>n.s</i>
	合計 (0-100)	38.67	17.76	36.95	17.46	<i>n.s</i>

* $p < .05$, † $p < .10$

について、女性よりも男性の方が有意に高い得点を示していた。

WURS の合計の平均値は37.49であった。WURS の下位検査の平均値は、易怒性・易興奮性8.31 (SD =6.13), 衝動性10.71 (SD =6.01), 情緒不安定性10.22 (SD =4.86), 学業不振3.07 (SD =2.75), 対人関係障害5.18 (SD =3.48) であった。WURS のカットオフ値を超えた者は38名 (30.6%) で、男性12名 (30.7%), 女性26名 (30.5%) であった。男女差の t 検定を行った結果、下位項目および合計得点において、性別による有意差は見られなかった。表1に、平均値と t 検定の結果を示す。

1. AQ と WURS の関連

AQ と WURS における下位項目間の相関分析の結果を表2, 表3に示す。男性においては、社会的スキルと対人関係障害 ($r = .52, p < .01$), 注意の切り替えと対人関係障害 ($r = .48, p < .01$), コミュニケーションと対人関係障害 ($r = .62, p < .01$), コミュニケーションと易怒性・易興奮性 ($r = .45, p < .01$), コミュニケーションと衝動性 ($r = .45, p < .01$), コミュニケーションと情緒不安定性 ($r = .45, p < .01$), 注意の切り替えと衝動性 ($r = .36, p < .05$), 想像力と対人関係障害 ($r = .40, p < .05$) の8つで有意な正の相関が認められた。一方、女性においては、注意の切り替えと対人関係障害 ($r = .32, p < .01$), コミュニケーションと衝動性 ($r = .39, p < .01$), コミュニケーションと情緒不安定性 ($r = .34, p < .01$), コミュニケーションと学業不振 ($r = .29, p < .01$), コミュニケーションと対人関係障害 ($r = .37, p < .01$) の5つで有意な正の相関が認められ、細部への注意と学業不振 ($r = -.22, p < .05$) で有意な負の相関が認められた。

以上の結果から、男女ともに、注意の切り替えと対人関係障害, コミュニケーションと対人関係障害, コミュニケーションと衝動性, コミュニケーションと情緒不安定性, において有意な相関を示したことが明らかと

なった。また、男性のみに関連性があるものは、社会的スキルと対人関係障害、コミュニケーションと易怒性・易興奮性、注意の切り替えと衝動性、想像力と対人関係障害であり、女性においてのみ関連性があるものは、コミュニケーションと学業不振、細部への注意と学業不振であることが明らかとなった。

表2 男性における各尺度の下位項目の相関係数

		男性 (n = 39)				
		WURS				対人関係 障害
		易怒性・ 易興奮性	衝動性	情緒 不安定性	学業不振	
AQ	社会的スキル	.27	.20	.31	.25	.52**
	注意の切り替え	.24	.36*	.10	.18	.48**
	細部への注意	.10	-.14	-.08	.06	.05
	コミュニケーション	.45**	.45**	.45**	.31	.62**
	想像力	.30	.20	.31	-.06	.40*

** $p < .01$, * $p < .05$

表3 女性における各尺度の下位項目の相関係数

		女性 (n = 85)				
		WURS				対人関係 障害
		易怒性・ 易興奮性	衝動性	情緒 不安定性	学業不振	
AQ	社会的スキル	.21	.28	.23	.22	.47
	注意の切り替え	.07	.19	.20	.15	.32**
	細部への注意	.11	.12	.18	-.22*	-.01
	コミュニケーション	.15	.39**	.34**	.29**	.37**
	想像力	.15	.20	.10	.00	.17

** $p < .01$, * $p < .05$

2. 学習の困難度とAQ, WURSとの関連

表4に学習の困難度尺度の平均値, 標準偏差を示す。本調査で用いた, 自己評定式の学習の困難度で, 「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の6つの領域のうち, 1つでも困難を抱えている者は20名(16.1%)であった。その20名のうち, 男性は5名, 女性は15名であった。6領域の中で, 最も困難を抱えている人が多かった領域(重複該当あり)は, 「聞く(11名)」で, 次に多かったのが「話す(9名)」であった。他の領域は, 「読む(2名)」, 「書く(1名)」, 「計算する(3名)」, 「推論する(1名)」であった。学習に困難がない群(104名)と学習に困難がある群(20名)のAQ, WURSを比較したところ, AQの合計得点($t = -2.869, p < .01$), 下位項目の「コミュニケーション($t = -3.403, p < .01$)」において有意差が見られた。また, 下位項目の「社会的スキル($t = -1.791, p < .10$)」, 「想像力($t = 1.862, p < .10$)」では有意傾向が見られた。また, WURSの合計得点($t = -3.76, p < .01$), 下位項目の「衝動性($t = -3.802, p < .01$)」, 「情緒不安定性($t = -3.043, p < .01$)」, 「学業不振($t = -2.12, p < .01$)」, 「対人関係障害($t = -3.802, p < .01$)」に有意差が見られた。表4に, 平均値と t 値を示す。

表4 学習困難尺度の平均値, 標準偏差, 下位尺度のカットオフ得点以上の人数

	Mean	SD	カットオフ以上の人数 (%)
「聞く」	6.90	3.18	11名 (8.8)
「話す」	5.91	3.49	9名 (7.2)
「読む」	3.15	2.53	2名 (1.6)
「書く」	3.02	2.57	1名 (0.8)
「計算する」	2.74	3.18	3名 (2.4)
「推論する」	3.58	2.94	1名 (0.8)

表5 学習困難の有無によるAQ, WURSの平均値, 標準偏差, *t*値

		学習に困難がない (n = 104)		学習に困難がある (n = 20)		<i>t</i> 値
		Mean	SD	Mean	SD	
AQ	社会的スキル (0-10)	4.37	2.34	5.4	2.5	1.791 †
	注意の切り替え (0-10)	5.29	1.84	5.9	1.71	<i>n.s.</i>
	細部への注意 (0-10)	4.73	1.98	4.75	2.22	<i>n.s.</i>
	コミュニケーション (0-10)	3.28	2.45	5.25	1.89	3.403 **
	想像力 (0-10)	2.83	1.62	3.45	1.32	1.862 †
	合計 (0-50)	20.49	5.89	24.75	5.89	2.869 **
WURS	易怒性・易興奮性 (0-24)	7.99	5.91	10	7.09	<i>n.s.</i>
	衝動性 (0-32)	9.86	5.83	15.15	4.93	3.802 **
	情緒不安定性 (0-16)	9.65	4.71	13.15	4.69	3.043 **
	学業不振 (0-12)	2.85	2.64	4.25	3.09	2.12 **
	対人関係障害 (0-16)	4.68	3.32	7.75	3.21	3.802 **
	合計 (0-100)	35.03	16.97	50.3	14.7	3.76 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

考 察

本研究では、一般大学生を対象に、ASD, ADHD, LD といった発達障害傾向の把握と、それぞれの障害の関連性を検討した。

本調査では、AQによるASD傾向を有する者が、3.2%存在し、AQの合計得点は女性よりも男性の方が高かった。これは、先行研究¹¹⁾と一致する結果となった。また、WURSによるADHD傾向を有する者が、30.6%存在し、性差は見られなかった。これまでのWURSの研究では、本邦におけるカットオフ点の設定の問題が指摘されており¹²⁾、日本語版WURSが学童期のADHDの見られる問題行動の中でも、多動傾向の同定には有用であるが、注意欠如の同定には課題が残されていることが報告されてい

る¹³⁾。

次に、AQ と WURS の関連性において、男女共通で、AQ の下位項目「コミュニケーション」と WURS の下位項目「衝動性」、「情緒不安定性」「対人関係障害」に関連が見られた。この結果は、コミュニケーションが苦手だと認識している者は、衝動性のコントロールを苦手とし、情緒面が不安定で、対人関係障害があると考えている者が多いことを示唆している。また、女性のみ関連性があるものは、AQ 「コミュニケーション」「細部への注意」と WURS 「学業不振」であり、コミュニケーションが苦手な者は、学業に問題があったと考え、細部への注意が向きやすいものは学業に問題がなかったと考えていることが示唆された。一方で、男性のみに関連が見られるものは AQ の下位項目「社会的スキル」・「想像力」と WURS 「対人関係障害」であり、社会的スキルに困難があり、想像力に欠けると考えている者は、対人関係障害があると考えていることが明らかとなった。また、AQ 「コミュニケーション」と WURS 「易怒性・易興奮性」と関連があったことから、コミュニケーションが苦手だと感じている者は、興奮しやすく、怒りやすいといった特性があると認識していた。更に、AQ 「注意の切り替え」と WURS 「衝動性」で関連があり、注意の切り替えが苦手な者は、衝動性のコントロールを苦手と考えている者が多いことが明らかとなった。よって、全体的には、コミュニケーションの問題が、情緒面の問題、対人関係の問題と関連している可能性が明らかとなった。また、性別により、AQ と WURS の関連性は異なっており、女性は学業不振といった学業面の問題と AQ の下位項目が関連する傾向があったが、男性は易怒性や衝動性といった情緒面の問題と対人関係の問題に、AQ の下位項目の関連している傾向が明らかとなった。

また、学習に困難を抱えていると思われる者が、16.1%存在していることが明らかとなった。更に、学習に困難を抱えている者は、困難を抱えて

いない者よりも AQ, WURS の得点が、有意に高いことが示された。学習に困難を抱えている者は「コミュニケーション」が苦手で、衝動性のコントロールが難しく、情緒面が不安定であり、対人関係に問題を抱えていると考えていることが示唆された。これには、学習に困難を抱えている者の中でも、「聞く」「話す」といったコミュニケーションに必要な能力に難しさを抱えている者が多かったことから、コミュニケーションが苦手だと認識している者が多数いた可能性も考えられた。つまり、学習に困難を抱えている者は、「聞く」「話す」ことの困難さが、コミュニケーションの問題、情緒面の問題、対人関係の問題を抱える要因となっている可能性が考えられた。現在、学習面の困難を抱えている者の多くは、アルバイトやサークル活動等の、主体的なコミュニケーションが必要となる大学生活において、他人と馴染めない、仕事でミスをしてしまうといった困難を抱える可能性が高いだろう。近年、コミュニケーションの障害がありクラスになじめずに不登校になる学生の増加や、大学の大衆化や学力低下と関連した休・退学、留年率の上昇への影響が指摘されている¹⁴⁾。また、大学生の多くは就職活動をするが、厚生労働省が行った調査で、企業が若年者の採用にあたり重視している能力は「コミュニケーションの能力」であったと報告されている¹⁵⁾。つまり、大学には、留・退学を防ぐだけでなく、社会に出るまでの準備段階として、コミュニケーション能力を修得させることも求められている¹⁶⁾。よって、本研究により学習の困難さを抱えている学生の多くが、「聞く」「話す」といったコミュニケーションに関係した学習能力のサポートを行うことで、留・退学を防ぐだけでなく、社会に出て行く前の学生に一定以上のコミュニケーション能力を修得させる最後の機会を与えることができるかもしれない。しかしながら、本調査は一回だけの調査であり、縦断的に調査していくことで、より詳細な発達障害傾向を持つ者の実態や困難を把握し、彼らのニーズに合ったサポートを提供す

る必要があると思われた。

以上のことから、情緒面、対人関係に問題を抱えている者だけではなく、学習に困難を抱えている者に対するサポートも重要となるだろう。

注

- 1) American Psychiatric Association. *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Health Disorders, Fifth Edition (DSM-5)*. Washington, DC; American Psychiatric Association: 2013. (高橋三郎, 大野裕監訳, 染矢俊幸, 神庭重信, 尾崎紀夫, 三村將, 村井俊哉訳: DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版, 医学書院, 東京, 2014)
- 2) 佐藤克敏; 徳永豊. 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状. 特殊教育学研究, 2006, 44.3: 157-163.
- 3) 小林由佳. 大学生における軽度発達障害に関する調査とその支援. 研究助成論文集, 2006, 42: 30-36.
- 4) 花塚優貴・緑川晶. 一般大学生における注意欠陥・多動性と自閉症の傾向について—WURSとAQを用いた予備的調査—. CAMPUS HEALTH, 2014, 51.2: 193-198.
- 5) 楠本久美子; 八木成和; 広瀬香織. 大学・短期大学における発達障害及びその疑いのある学生への支援の現状と課題. 2010.
- 6) 注4), 5) と同じ。
- 7) 若林明雄他. 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討—. 心理学研究, 2004, 75.1: 78-84.
- 8) WARD, Mark F. The Wender Utah Rating Scale: An Aid in the Retrospective Diagnosis of Childhood Attention Deficit Hyperactivity Disorder. *Am J Psychiatry*, 1993, 1.50: 885-890.
- 9) 下津咲絵他. 中学生における多動傾向と自尊感情の関連—Wender Utah Rating Scale を用いた予備的研究. 精神医学, 2006, 48.4: 371-380.
- 10) 文部科学省. 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について (概要). 週刊教育資料, 2012, 1235: 39-50.
- 11) 注7) と同じ。
- 12) 注4), 9) と同じ。
- 13) 注9) と同じ。

- 14) 内田千代子. 休・退学, 留年調査からみた今どきの大学生. CAMPUS HEALTH, 2009, 46.2 : 39-44。
- 15) 葛城浩一. 学生のコミュニケーション能力に関する現状と課題. 香川大学教育研究, 2008, 5 : 1-11。
- 16) 厚生労働省. 企業が若年者に対して求める能力要件に関する調査研究事業報告書, 2004。

